

# 8 家 庭 科

森 富 恵

## 1. 個が生きる家庭科授業

平成元年3月の教育課程の改訂において、家庭科については、科学技術の進展や産業構造の変化などによる社会や家庭生活の変化、家庭の機能や教育力の低下などに対応して改善が行われた。小学校家庭科については、教育課程審議会の答申に示された改善の基本方針に基づいて検討されたが、その主なねらいは次のようである。

- (1) 日常生活に必要な衣食住などに関する基礎的な知識と技能を習得し、自分の身の回りのことを処理する能力を育成すること
- (2) 家庭生活の意義や在り方を理解し、家族の一員としての自覚を高めるとともに家族や家庭生活を大切にする心情を育成すること
- (3) 社会や家庭生活の変化に対応して、生活上の課題を主体的に解決する能力や態度を育成すること

以上のようなねらいに基づき、小学校学習指導要領は家庭科の目標を次のように示している。

衣食住などに関する実践的な活動を通して、日常生活に必要な基礎的な知識と技能を習得させるとともに家庭生活についての理解を深め、家族の一員として家庭生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる。

この学習指導要領の目標・内容を参考にしながら、本校での家庭科のあり方を考え、「個が生きる」という研究テーマのもとに、児童一人一人が自分の力によって、基礎的・基本的な内容を身に付け、個性を発揮できる授業を重視し、将来、子供達が創造的に主体的に生きていくことのできる資質や能力の基礎を育成することをめざしている。本校における個が生きる家庭科授業については、次のように捉えている。

- ・ 一人一人が意欲的・主体的にめあてに取り組み、達成感を味わうことができる授業
- ・ 一人一人が自分や友だちの考え・発想・よさを認め、さらにそれを自分なりに生かそうとすることができる授業

特に、個が生きる家庭科授業では、一人一人の児童が、よりよい家庭生活をめざして生活上の課題を解決したり、創意工夫したりする実践的な態度を育てていくことを大切にしていきたい。

そして、個が生きる家庭科授業作りにおいては、

- ① 個の実態を把握し、それを指導に生かす。
- ② 一人一人の考え・発想・よさなど個の存在を認める雰囲気作りをする。
- ③ 学習のめあてを意欲的に追求させるような題材構成・教材・教具・発問・場の工夫をする。
- ④ 実践化に向けての評価の場を設定する。

という4つの条件を考えている。

## 2. 個が生きる家庭科授業の評価

### (1) 評価の基本的な考え方

出来た作品や身に付けた知識や技能など結果のみを評価するのではなく、児童が日常生活に関する課題に進んで取り組み、考えたり、判断したり、実践したりするなどの活動の過程を重視して評価をおこなう。また、関心・意欲・態度が育ったか。思考力、判断力、創意工夫する能力、表現力などの能力や資質が育ったか。知識や技能が身に付き理解が深まったかなどを評価し、一人一人の児童のどこが伸び、どこがつまづいたかを把握し、常に指導のあり方を評価しながら、学習指導の改善に役立てていく。評価は、児童が目標にどの程度近づいたかを児童自身に知らせ、次の学習活動に進むための道しるべにさせるためのものであり、同時に、教師が自分の指導計画や指導方法を反省してさらに改善・充実させていくためのものであると考える。そのためには、授業を次の観点から反省・検討を加えてみる必要がある。

- ① 適切な目標が設定されていたかを授業ごとに評価・反省し、慎重に修正しフィードバックして児童の実態に適したものにしていく。
- ② 教材の選択や取り扱いが適切であったか。教材の選択や取り扱い方が児童の能力、興味・関心に即応していたかどうかなど、児童の実態を踏まえて検討してみる。
- ③ 学習指導の方法は適切であったか。教材や資料は適切であったか。調査、観察、実験などの活動の場の取り入れ方はどうだったか。個別学習かグループ学習かなど、指導方法について検討する。

### (2) 評価の方法

- ・共感的・受容的な態度で子どもたちを暖かく見守る。
- ・家庭科のねらいにつながる活動は、積極的に取り上げたり、言葉かけを行う。
- ・感想への朱書の返事
- ・座席表への気付きの記入
- ・子供達一人一人が活動について振り返る場を設定する。

## 3. 自己を高める評価力の育成

よりよい自分の姿をめざして自己を高める資質を育成していくということは、家庭科においては、よりよい家庭生活をめざして生活上の課題を解決したり、創意工夫したりする実践的な態度を育てていくことだと考える。そのためには、自己評価や相互評価を取り入れ、目標に対する達成状況や問題点などを児童自身が把握し、それに対処する方法を考えるように仕向けることが大切である。児童自身が自己評価しながら作業を進めることは、仕事の仕方を学習する方法としても効果的であり、その際、児童相互に評価し合う場を設定すると、自分とは違った作業の方法や進め方を学ぶことが出来たり、誤りに気付くことが出来たりする。このようにして自分で学ぶ力を付けるために自己評価、相互評価を有効に位置付けたい。その場合は、標本や作品、評価基準の具体例などを多く用意し、的確な自己評価が出来るように工夫する。このような自己を高める評価力の育成には、授業における児童の強いめあて意識の形成が重要であり、そのめあてを追求する活動によって自分がどう変容したのか活動について児童自身が振り返ることの出来る場が必要である。特に、家庭科においては、授業の中でどの様に変容したかにとどまらず、「私は、これからどうしようと思うのか。」実際の家庭生活へつながる意識を形成することも大切である。